

雑司が谷旧宣教師館だより

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 Tel/Fax 03-3985-4081

目次

1～3ページ ……『赤い鳥』で再会 ～岡本太郎～

(ミニ企画展ご案内)

4ページ ……旧宣教師館イベント報告

『赤い鳥』で再会 ～ 岡本太郎 ～

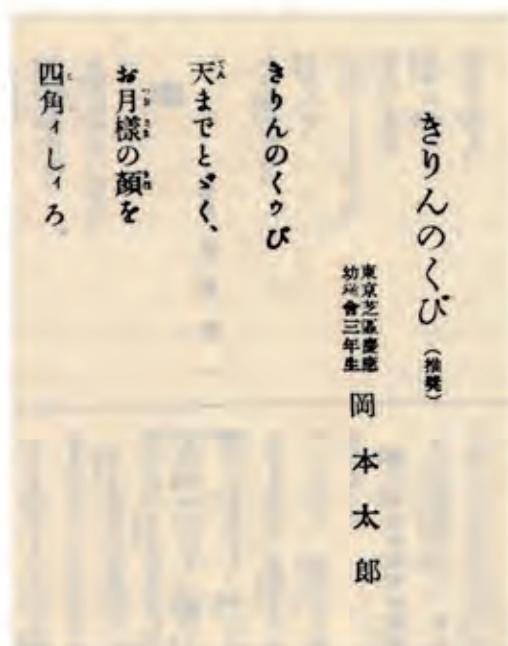



図1 『赤い鳥』第5巻第6号 (日本近代文学館・複製版、昭和54年)

大正時代創刊の童話・童謡雑誌『赤い鳥』と聞いて、何を思い浮かべるだろう？ 清水良雄画の仔馬に乗って連れ立つ少女二人が飾る創刊号の表紙絵だろうか。芥川龍之介、菊池寛、北原白秋といった、当時の錚々たる文人の寄稿・協力があったことだろうか。歴史の教科書や副読本によく取り上げられていることで、今でも多くの人に何となく知られてはいるが、刊行当時に熱狂的な多数の愛読者が存在したことからすれば、現代人に微かな印象を留めているに過ぎないと言える。しかし大正7年(1918)から昭和11年(1936)まで、途中休刊を挟みながらも出版され続けた全196冊にゆっくりと目を通して行くと、そんな茫洋とした印象が吹き飛ぶことがある。意外な文化人や有名人が、巨大隕石が尾を引いて地球をかすめて行くように、当時の子ども教育や時代の雰囲気と匂いを合わせつつ、登場したかと思うと消えて行くのに出会うからだ。例えば岡本太郎である。

子供向けの雑誌『赤い鳥』と「岡本太郎」に関連性を見いだせず、思わず「どの岡本太郎？」と聞きたくなるかもしれない。「芸術は爆発だ」の、あの岡本太郎である。実は幼少時、『赤い鳥』に童謡詩を投稿して採用されていたのである。大正9年(1920)12月刊行第5巻第6号に「きりんのくび」という詩が(図1)、“東京芝区慶應幼稚園三年生・岡本太郎”の明記と共に掲載された。



岡本太郎は漫画家・岡本一平を父に、歌人・岡本かの子を母に持ち、明治44年（1911）に生まれた。芸術一家という特殊な成育環境もあり、大正6年（1917）に地元青山の青南小学校にあがるが馴染めず、転校を繰り返した。翌年に一年生からやり直す形で慶應幼稚舎に入学し^(註1)、ようやく落ち着き、寄宿舎生活を始めた。「きりんのくび」はその2年後の作である。子供らしい瑞々しさに、選者・北原白秋が選評の冒頭で高評している。

岡本太郎がこの詩を書いた頃、実は東京にキリンはいなかった。現在の私達がありふれた光景として思い浮かべる動物園のキリンと歓声を上げる子供たちの姿は、当時は無かったのである。

日本に初めてキリンが2頭輸入され上野動物園に入ったのは、明治40年（1907）、奇しくも当旧宣教師館が建てられた年である。しかし飼育の環境整備の拙さもあり、翌年には2頭とも死亡している。明治44年生まれのお岡本太郎は見ている。次にキリンが輸入され、上野に来たのは昭和8年（1933）で、岡本太郎は既に22歳の成人となり、パリで積極的な活動をしていた頃である。つまり、幼い岡本太郎が「きりんのくび」を書いた頃の全国平均の日本の子供にとって、キリンは生活上全く縁の無い動物だったのである。それを裏打ちするかのように、『赤い鳥』投稿作品のタイトルを見ると、牛、馬、ウサギのような身近な動物を主題にした作品の多さに比べ、キリンがタイトルの作品は全冊を通して2編ほどしかない。そのうち、初めてキリンを取り上げているのが岡本太郎である。

生きているキリンを見ていない筈なのは、幼い岡本太郎も同じである。どうしてこのような詩を書けたのだろうか？いくつかの可能性が考えられる。例えば、明治の教育絵図にキリンが記載されているものがある^(註2)。大正の教育熱心な家庭の子が知識としてキリンを知っているのは不思議ではないと考えられる。また、恩賜上野動物園の前身であり所管でもある山下門内博物館（現・東京国立博物館の前身）に、明治10年（1877）キリンの剥製が入ったことが新聞報道されている^(註3)。前述の日本初のキリン2頭も、死後、剥製にされている。東京で生まれ育った岡本太郎がキリンを目にしたとすれば、この剥製も有力候補である。いずれにせよ、大正時代に遠い異国のサバンナを感じさせる動物を題材にして、生き生きとした詩を書いた個性の強い子供に、我が道を追求した成長後の岡本太郎の萌芽を感じないだろうか。

ところで、成人後の岡本太郎の詩作活動はどうだったのであろうか？あれだけアート作品も著書も多作の芸術家である。当然、詩集もあるのではないかと。意外なことだが、詩集どころか詩の作品自体が少ない。昭和23年（1948）2月2日に読売新聞に発表された「聖火と短刀」が公に発表された最初の詩である^(註4)。これは、シュルレアリスム運動の法王であり、岡本太郎と交流もあったアンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』への返歌のような影響関係を感じさせつつ、花田清輝らと始めた「夜の会」の設立宣言をした詩である。この後、同年11月に出版した『アヴァンギャルド 岡本太郎画文集』（月曜書房）に、先の「聖火と短刀」の他5編の詩を掲載してあるが、この本は単独の詩集ではなく、

絵画作品の複製画、芸術論、半創作半自伝の小説を集めた、文筆作品集である。それ以後、リリカル（抒情詩的）な表現を使う芸術論やエッセーは多数あるが、はっきりと詩集と言える本は出していない。

日本で和歌が文化人の嗜みであったように、ヨーロッパの文化ではルネサンス時代の昔から、詩作は知識人・文化人の教養の証であった。画家であっても詩を書くのは珍しくなく、岡本太郎が尊敬するピカソも詩集を出している。岡本太郎がごく初期の段階で詩に手を付けなくなったのは、やや不思議な気がする。詩の代わりというつもりはないだろうが、文字表現の延長として、字を“絵”として描いた岡本作品は、産業デザイン分野への提供も含め、多く残る。もしかすると、幼少時に「きりんのくび」で見せた言葉に対する閃きは、別の表現形態を選んだのかもしれない。

*本稿執筆にあたり、岡本太郎記念館、川崎市岡本太郎美術館に貴重な示唆を頂きました。ここに記すと共に、厚く御礼を申し上げます。岡本太郎氏の寄稿文部分の当りよりへの再掲載は、岡本太郎記念現代芸術振興財団の他、財団法人日本近代文学館、読売新聞社の承諾の下行われております。無断で複製、送信、出版、頒布、翻訳、翻案等著作権を侵害する一切の行為を禁止いたします。

- (注1) 加藤三明「芸術は爆発だ! —岡本太郎」、『三田評論』No. 1150、2011年5月号
 (注2) 田中芳男選、久保弘道校、服部雪斎画『動物第一 獣類一覽』文部省、明治6年(1873)
 (注3) 読売新聞朝刊、明治10年(1877)9月22日、p3
 佐々木時雄『動物園の歴史 —日本における動物園の成立—』株式会社講談社、昭和62年(1987)
 (注4) 岡本太郎『遊ぶ字』日本芸術出版、昭和56年(1981)



聖火と短刀

(題と文) 岡本太郎

聖火は夜行われる。

人民を焼くくわい後に

聖火、殺人、サギ、強姦と、新

聞の三面記事

聞け! 人民の無言の苦痛を...

犯罪とは何か?

清らかな処女の左手の短刀はひ

らぬ

見よ! 彼女の右手の聖火は無

意味を失く!

彼女こそ運命の女神!

図2 読売新聞、昭和23年2月2日朝刊、p3
提供、読売新聞社

ミニ企画展のご案内

2011年は岡本太郎生誕100年の年にあたり、東京国立近代美術館での回顧展『生誕100年岡本太郎展』を始め、関連企画が各地で多数行われました。岡本太郎と豊島区ゆかりの『赤い鳥』との意外な関係から始まった本論を元に、当館でもささやかながら展示を行っております。どうぞお楽しみください。

会期 2011年12月23日～2012年3月31日、会場 2階東側寝室、無料

旧宣教師館イベント報告

2011 年秋の東京文化財ウィーク参加事業

● 『赤い鳥』を語り継ぐおばあちゃんのおはなし会

講師：小森香子

10月1日、11月5日（土） 午後2時～3時

・小川未明の作品と『赤い鳥』掲載作品の計2作の読み聞かせが普段のおはなし会ですが、特別プログラムとして詩の作品も加えました。10月は北原白秋と、天才少女詩人と呼ばれ『赤い鳥』に多数の童謡詩を投稿した”海達公子”さんの作品。11月は西條八十の童謡詩。歌を交えたり詩として朗読したり、新鮮な朗読会となりました。



● 秋のガーデンコンサート

出演：加藤悦子・小木曾雅美・鈴木かおり（ソプラノ）

小林恵（オーボエ）、中村紘子（フルート）、

中尾尚子・桜本久（マンドリン）、大淵純子（マンドラ）、

佐藤弘和（ギター&編曲）

10月9日（日） 午後2時～4時

・恒例のガーデンコンサート。山田耕筰の「この道」やJ.S. バッハの「コーヒーカンタータ BWV. 211」など、誰もが知っている曲から少し珍しい曲まで、たくさんの方が聞き入りました。最後はお客さまも交えて「赤とんぼ」「小さい秋みつけた」の大合唱でしめくり。



● ちいさな洋館の音楽会

出演：佐藤ちづ子（チェンバロ、ピアノ）、池辺美智子（マリンバ）、

佐々木由美（マリンバ）、葛西裕子（ソプラノ *10月22日のみ）

10月22日、11月26日（土） 午後2時～3時

・当館展示資料の大正末～昭和初め製造の西川製ウェスタンピアノに、マリンバ、チェンバロがクラシックから現代音楽、そして『赤い鳥』の童謡まで生演奏！まるで旧宣教師館自体が楽器になったように美しい音色が響きました。



● 旧宣教師館建築解説

講師：角野茂勝（伝統技法研究会所属、

平成22年度雑司が谷旧宣教師館保存修理工事監督）

11月12日（土） 午前11時～12時、午後2時～3時（事前申込み、各回20名）

・普段は目に触れない建築の中側や、平成22年度の保存修復工事で判ったことを交え、プロの目から見た建築を見るポイントを、当館を実際に見てまわりながら解説。丁寧な説明が好評でした。またこの日は角野氏の協力で小屋裏を特別大公開しました。

（敬称略）

